

三方原台地の開拓と農業水利

＜三方原用水＞

1. 位置

静岡県浜松市

2. 規模

秋葉ダム取水口、トンネルおよび開水路等

$L=42.8$ km, 受益面積 4,405 ha

3. 経緯

三方原台地は天竜川河口に形成された扇状地がいったん隆起したのち、さらにこの隆起した大地を天竜川が再度浸蝕して河道を下げ、残された隆起地の残片であるとされ、台地上に河川はなく、三方原の土質が酸化鉄で強い酸性であり、耕作に不適であったことから、明治維新时期まで「荊棘繁茂、狐狸安棲スル廢地」と表現されており、水の不便さと赤褐色の痩せ地による不毛の地であった。

明治7年に「気賀 林」らにより茶園開墾事業が行われ、「百里園」が開園され、三方原における茶樹育成、摘茶、製茶加工、販売までの全行程を一貫して行う経営を行い、三方原茶園の名声を全国に轟かせることとなる。

天竜川の水を三方原方面へ分水する「運河開削計画」は明治5年頃、「金原明善」らによって計画された、天竜川の鹿島地先から「西方へ新川を開削分流して、都田川から浜名湖へ通ずる」とする、天竜川の分水構想である。その後に金原明善らによって進められた「天竜川分水路開削計画」と「金原治山治水財団」を生み、金原用水を完成して、戦後の三方原用水実現へと続く端緒となっていく。

明治32年に策定された「天竜川分水路開削計画」(図-1)は、三方原へ天竜川の水を導水して開墾を進め、三方原からの落水等を利用して、浜名平野の不良

用水の改善と浜名平野の落差を利用した発電事業や船による通運も視野に入れたものであったが、多目的で大規模な計画であったため、膨大な工費の工面や用水に関連する諸町村との協議などの多くの課題を有していたため実現には至らなかった。

その後、取水地点を鹿島地先とし、 $11.1 \text{ m}^3/\text{s}$ を導水し、発電、浜松市の上水、天竜川右岸地域の灌漑などと併せて、三方原にポンプ揚水して灌漑することを目的とする、「浜名水力発電事業計画」が大正14年に認可されたものの、工事自体は当時の社会情勢では一般に受け入れられず中止されてしまった。

昭和12年に県営浜名用排水幹線改良事業が実施され、浜名用水地域の水田3,520町歩への灌漑が行われた。地元負担金については「金原治山治水財団」が所有する山林の伐採、売却益を寄付してきた。工事は昭和16年に農地開発営団に引き継がれ、天竜川左岸の磐田用水地域も包括して、「天竜川沿岸用排水改良事業」として戦時中も継続して行われ、昭和21年に鹿島の取水口が完成し、仮通水をみるに至った。

三方原台地の開拓は、戦後の食糧増産計画のもと、旧陸軍の飛行場と爆撃場として利用されていた約9,000町歩の荒廢地において、緊急開拓事業により入植者による開墾が行われた。これと併せて、昭和20年より農地開発営団が幹線用水路・幹線排水路・幹線道路・揚水機設備等の工事を始め、昭和22年に農林省直轄の「三方原開拓建設事業」に継承され、昭和35年に完工した。本事業により三方原台地の水田開発475町歩と開畑984町歩の計1,459町歩を開墾・整備した(写真-1, 2)。

開拓事業により三方原地域の開墾整備した一部の農

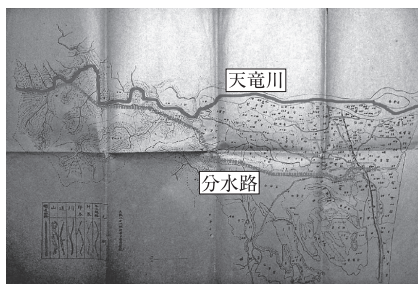


図-1 「天竜川分水路開削計画」の計画図



写真-1 第一機場・第二機場回りから三方原台地を望む



写真-2 三方原工区の全景

地には配水可能となったものの、地域内の農地では依然として、都市近郊の良好な立地条件にありながら農業用水の確保が困難なため、常に不安を抱いた農業経営を余儀なくされてきた。

このような中、昭和 29 年に「天竜東三河特定地域総合開発計画」が決定され、その一環として農業用水・工業用水・上水道用水を開発する三方原用水事業が昭和 35 年から着工された。

国営三方原用水事業により、昭和 43 年に三方原への農業用水の初通水を行ったが、これは明治 32 年の金原明善による「天竜川分水路開削計画」、つまり天竜川から分水して三方原台地を灌漑する案を現代版にしたものである。

天竜川の水を秋葉ダムから三方原台地に導水するこの事業の完成により、「圃場整備、畑地灌漑、農道」等の各種の農業基盤整備が急速に進展したことにより、三方原の地域農業は一変し、多種多様な農産物が生産され、農業粗生産額は常に全国でも上位にランクされ、地域社会に貢献しながら発展をとげている。

4. 技術史

戦後の入植者による開墾について、総入植農家は 1,450 戸ほどであったが、「純入植者」の多くは、金、農具、住宅、肥料、牛馬もなく、国、県、農協等からの現物支給や補助金、貸付金などが頼りであった。昭和 23 年の国・県等による各種支援として、開墾鋤、炭カル、共同利用の農具、牛馬車具、牛の現物融資や営農資金の貸付けなどを行っている（写真-3）。

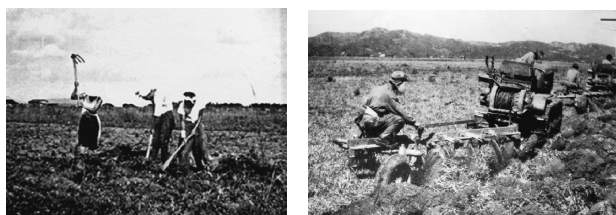


写真-3 開墾の様子

また、土地は強酸性で作物は育たず、サツマイモを植えても蔓は 1m しか伸びず、芋も小指程度といった状況で、有機質肥料の投入が必要となり、浜松市街地の生ゴミ等を大八車や牛車で調達し、有機質の投入に励んでいた。また、開拓建設事業に基づく道路・用水路・排水路の建設は、入植者が交代での出役による手作業で行われ、その出役は有償で入植者の生活費稼ぎになったとされる（写真-4）。

三方原開拓建設事業は開発整備する 1,459 町歩の水田・畑を潤すため、天竜川から取水している既存の浜名用水幹線を拡張するとともに、制水門および取水門を設置して導水路により引水し、三方原台地の 50



写真-4 出役での小水路造り



写真-5 用水路で水遊びをする子供たち

m の崖を第一機場、第二機場で揚水し台地上の水田、畑に配水（写真-5）するものである。

図-2 の三方原用水事業は電源開発（株）が昭和 33 年に完成させた秋葉ダムの右岸に取水口を造成し、隧道、サイホンで三方原台地北端まで導水し、北部幹線および南部幹線により三方原地区内の農地に配水するものである。



図-2 三方原用水事業概要図

5. 歴史に名を残した人々

気賀 林：文化 7 年（1810）に引佐郡気賀村に生まれた実業家。浜名湖北岸の商業の発展のため、三方原開拓や運河開削などのインフラ整備を駿府藩に建言し、さらに三方原への静岡藩士の移住と開墾入植による農業開発の提案がなされ、その後の三方原開拓の土台を作ったとされる。

金原明善：天保 3 年（1832）に長上郡安間村に生まれた実業家。三方原の農業の発展と浜松地区の工業用水の確保を目的とした、「天竜川分水計画」を立案し、事業計画策定のために、長期の歳月と多額の資金を費やして、実地測量を行い用水路の設計を行ったものの、当時の土木技術では実現の見込みはないとされた。この計画はその後の天竜川利水の第一歩とされ、その後の事業の遂行に大きな役割を果たした。

（関東支部 渡辺英樹）